

平成20年度インターラボ開催報告

奥田昇（京大大学生態学研究センター）

開催日：平成20年4月8-12日

参加者：京都大学理学研究科生物科学専攻大学院生41名

生態学研究センターでは、平成19年度より京都大学理学研究科・霊長類研究所との3部局合同による「生物の多様性と進化研究のための拠点形成 - ゲノムから生態系まで - 」と題するグローバルCOEプログラムを実施している。「生物の進化と多様性」を包括的に理解するには、DNAレベルのミクロな視点と個体レベル以上のマクロな視点の双方から生命現象を階層横断的に捉えることが必要となる。言うは易いが、現在の細分化された生物学分野において、これを実践するのは容易なことでない。おそらく、多くの大学院生が研究室に配属されるや関連分野の論文漬けの日々を過ごし、運良く研究が軌道に乗ろうものなら、ますます興味が微に入り細に入りしてしまうということも少なくないだろう。もちろん、研究を深化させることは悪いことではないが、残念ながらそのようなアプローチから新たな学問の創出というのはなかなか起こらないものである。そこで、専門の異なる3つの部局がそれぞれの持ち味を活かして、次世代の生物多様性研究を担う独創的な若手研究者を育成することを目的として、「インターラボ」と称する教育カリキュラムを導入した。ミクロの研究者の中には研究材料とする生物が自然界でどのような生態を持つのか全く知らない者も多いだろうし、逆に、生き物を追いかけて野山を駆け回っているマクロ研究者の中にはDNAの解析を全く経験したことのない者も多いことだろう。本カリキュラムは、新大学院生が研究テーマを選ぶのに先立って、幅広い分野の研究に触れ、自身の研究人生の糧となるよう見聞を広めることを狙いとしている。

カリキュラムは5日間に亘って実施され、原子炉実験所、瀬戸臨海実験所、霊長類研究所などの施設を巡回しながら、最先端の研究トピックスや最新の機器に触れる機会を持った。当センターの施設見学は、4月11日に丸1日かけて実施された。午前中はプロジェクトリーダー・阿形氏た望の希望により、琵琶湖調査船「ハス」の体験乗船を行った。生態学研究センターの前身



初めての体験乗船に皆、興味津々

である大津臨湖実験所は 1 世紀近く前に創設された本邦初の陸水学を専門とする研究機関である。琵琶湖の生物多様性研究の礎であると同時に、長きに亘る研究成果の蓄積が今日の琵琶湖の環境問題解決の一助となっていることを実感してもらいたいとの意図によるものである。芳しくない天気予報とは裏腹にうららかな春の陽光に包まれて、皆、爽快な琵琶湖クルージングを満喫していたようだ。

午後はセンター本館に移動し、各教員の研究および当センターが推進している 3 つのグローバル COE プロジェクト、「陸上植物が作り出す生物群集ゲノミクスの解明（代表：大串隆之）」「魚類の栄養多型の発現機構および湖沼生態系への波及効果の実験的検証（代表：奥田昇）」「トンボ類の生息場所選択における至近要因と究極要因（代表：椿宜高）」の紹介を行った。休憩を挟んで、プロジェクト研究で使用している実験施設や分析機器の見学を行った。朝早くから船に揺られ、さらに昼食を摂った直後の講義なのでさぞや眠たかろうと思いきや、誰もが居眠りすることなく目を輝かせながら研究の話に耳を傾けていた姿がとても印象的だった。この中から将来の生態学を牽引する若きリーダーが登場することを期待したい。



熱心に講義に耳を傾ける参加者たち

最後に、インターラボの運営にご協力いただいた、事務職員、技術職員、ポスドク研究員、TA、RAの方々には心からお礼申し上げたい。